hanhart
ハンハルト

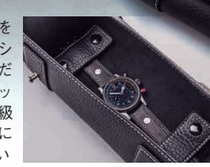
ギューテンバッハへ帰還した屈指のクロノグラフメーカー
名門ハンハルト日本再上陸

2017年7月。一時、日本から撤退していたハンハルトの日本における本格リ・ローンチが決定した。ドイツの黒い森でストップウオッチ、そしてクロノグラフを製造し、ドイツの時計史にその名を刻んだハンハルト。ドイツ屈指の名門ハンハルトとは、どんな存在だったのか。いま改めて、その歴史と現在を見つめてみたい。

構成・文◎佐藤杏輔（編集部）／写真◎笠井 修／撮影協力（オリジナルモデル）◎キュリオスキュリオ
Composition & Text by Kyosuke Sato（Editorial Department）／ Photograph by Osamu Kasai ／ Shooting in Cooperation（Original Models）by Curious Curio

バイオニア タキテレ

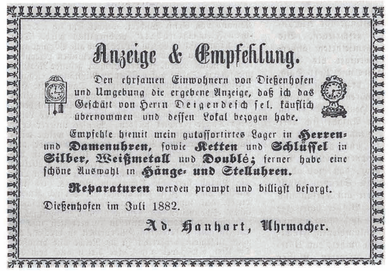
文字盤に時速計測用のタキメーター（内側）と距離計測用のテレメーター（外側）と、二つの計測スケールを備えて1939年に発表された、ハンハルトを代表する傑作“タキテレ”の意匠を再現した復刻版。オリジナルは主にドイツ海軍砲兵部隊で使用されたと言われ、43年に資材不足により製造中止。48年に製造が再開されたが、現存する個体は極めて少ない。
■Ref.712.210-001。SS（40㎜径）。10気圧防水。自動巻き（Cal.HAN3703）。34万5600円。右の時計はオリジナルモデル。クロームメッキ×SS（41㎜径）。非防水。手巻き（Cal.41）。1940年代製／コレクター私物



現行ハンハルトの製品を購入した際に付属するシュリンクレザーをふんだんに使用した革のウオッチケース。無骨だが高級感あふれる作りはいかにもドイツブランドらしい

●商品に関するお問い合わせは、リンクアップ（☎ 075-693-1236）まで

クロノグラフで名を馳せたかつてのハンハルト



Anzeige & Empfehlung.

Den ehrsamen Einwohnern von Dießenhofen und Umgebung die ergebene Anzeige, daß ich das Geschäft von Herrn Deigendesch sel. käuflich übernommen und dessen Lokal bezogen habe.

Empfehle hiemit mein gutassortirtes Lager in **Herren- und Damenuhren**, sowie **Ketten** und **Schlüssel** in **Silber, Weißmetall** und **Doublé**; ferner habe eine schöne Auswahl in **Hänge- und Stelluhren.**

Reparaturen werden prompt und billigst besorgt.

Dießenhofen im Juli 1882.

A. Hanhart, Uhrmacher.

スイス北東のライン川沿いにあるディースゼンホーフェンで創業したハンハルト。上の画像は、創業者ヨハン・アドルフ・ハンハルトがディースゼンホーフェンの住民に向けて、街の大通りに時計店を開くための施設を購入したことを宣言した当時の広告。日付けは1882年7月1日とある

オリジナルのタキテレのサイドビュー。ガラス風防は強度を保つためにドーム状に膨らんでいる。注目はボタンの位置だろう。リューズを中心に2時位置のスタート／ストップボタンと4時位置のリセットボタンは左右非対称の位置に設けられている

軍用モデルらしくリューズは操作性を考慮して、ひと際大振りなものが採用された（写真右）。シリンダー形ケースの中央部分に設けられた薄いラグは、このタキテレに限らず、当時製造されたハンハルトのクロノグラフのケースに共通するディテールとなっている

再び息を吹き返したジャーマンクロノグラフの名門

ハンハルトの設立は１８８２年。ヨハン・アドルフ・ハンハルトがドイツとの国境沿いの街、スイスのディースゼンホーフェンに開いた時計店がはじまりだ。創業はスイスだったが、１９０２年には拠点をドイツ南部のフィリンゲン・シュヴェニンゲンへ移転。以降はドイツで時計を製造し、ドイツ屈指の時計メーカーとして発展。なかでもハンハルトが際立っていたのが、ストップウオッチやクロノグラフの製造においてだった。

ドイツへと拠点を移した年に生まれた創業者ヨハンの息子、ヴィルヘルム・ユリウス・ハンハルト。彼は20年には早くもハンハルトでのビジネスに加わる。彼の商才がはじめて発揮されたのが24年に発表された世界初の廉価な機械式ストップウオッチだ。彼はスポーツ好きだったらしく、23年に開催された陸上競技会に参加。このとき主催者が使用していたストップウオッチの実情を目の当たりにしたことが彼をストップウオッチ製造に向かわせたきっかけになったとある。当時、ストップウオッチはほぼ独占的にスイス製のものが使用されており、いずれも高価なうえに品質はブランドによってまちまち。そこで彼は関係のあった時計メーカーと協働して、ピンレバー式の機械式ストップウオッチを考案・設計。安定した品質を備える廉価なストップウオッチの開発に成功した。以降、ハンハルトはストップウオッチの製造を基盤に発展し、30年代に入ると生産規模はさらに拡大する。34年にハンハルト社はフィリンゲン・シュヴェニンゲンから西、現在の本社がある〝黒い森〟に位置する街、ギューテンバッハに第2工場を設立。翌35年にはスプリットセコンド機能付きのストップウオッチ、さらに毎時３万６０００振動で１００分の1秒計測を可能にしたストップウオッチも開発。廉価なだけではなく、複雑で高精度なストップウオッチも生産する屈指の時計メーカーへと成長する。

そして38年。同社初にして、ドイツ初の腕時計クロノグラフとして開発されたのがＣａｌ・40だ。このクロノグラフ（後にプリムスと呼ばれる）はスタート、ストップ、リセットをひとつのボタンで行うワンプッシュ仕様だったが、翌39年にはツープッシュ仕様（後のレプリカ）のＣａｌ・41やフライバック機構を追加したＣａｌ・42も登場。同社のクロノグラフは、その性能を買われてドイツ軍に採用された。また、意図しないリセットを防ぐためにボタンを赤くペイントした〝レッドプッシャー〟、文字盤にタキメーターとテレメーター、二つの計測スケールを備えたクロノグラフ〝タキテレ〟は特徴的なスタイルから同社のアイコンともなった。

第2次世界大戦時、空軍パイロットや海軍士官が使用し、名を馳せたものの、終戦後はフランスの占領地域にあった二つの拠点の設備はフランス軍に接収され、ヴィルヘルムも10カ月間の投獄を余儀なくされた。釈放後、すぐにギューテンバッハの工場が再建されたが、彼はスイスへと逃れ、48年にスイスでクロノグラフの生産を再開。ドイツ、フランス空軍ではレプリカ、ドイツ海軍ではタキテレが採用。さらに医者や軍の職員向けのクロノグラフ、アドミラルも製造。50年代初頭には再び体制を整え、ハンハルトはストップウオッチの生産に注力した。

52年にフィリンゲン・シュヴェニンゲンにハンハルト本社が再建されると、54年、フランス軍はヴィクサ名の同社製フライバッククロノグラフを採用した。57～62年に掛けては、55年の再軍備で創設されたドイツ連邦軍向けにフライバッククロノグラフのタイプ４１７（真鍮メッキケースの４１７Ｅ、スチールケースの４１７ＥＳがあり、文字盤も数種類存在）を製造し、軍用クロノグラフ製造も本格的に復活。だが、62年に軍納入業者から外れると腕時計事業から撤退。以降は、ストップウオッチ専業として活路を見出す。

80年代になると、ヴィルヘルムの息子、クラウス・エブルが経営を引き継ぐが、ハンハルトが再び腕時計製造に復帰するのは、さらに10年以上を経た97年。同年8月にフルトヴァンゲンで開催されたアンティークフェアでレプリカの復刻版を２５００本限定で販売すると、これが瞬く間に完売。これを機に再びレプリカとタキテレが、２００１年にはプリムスも復活を遂げる。だが、経営を安定させるには至らなかった。08年にスイスの投資会社、ガイドール・グループの資本のもとで新たにハンハルト社（hanhart AG）をスイスのディースゼンホーフェンに設立。スイスメイドへの転換を図るが、14年には再びミュンヘンのＧＣＩマネジメントコンサルティング社（GCI Management Consulting GmbH）へと売却され、腕時計事業はすべてギューテンバッハのストップウオッチ事業部門（A. Hanhart GmbH & Co.）へ移行される。14年にはハンハルトの時計事業を統合するために新たなハンハルト社（Hanhart 1882 GmbH）が設立され、16年にすべての事業が現在のハンハルト社へと引き継がれた。

紆余曲折を経て体制を整えたハンハルト。17年7月にはラコも手掛けるリンクアップ社と輸入代理店契約を締結し、ジャーマンクロノグラフの名門の日本再上陸が実現。日本で展開されるラインナップの詳細は次のページで解説する。

ハンハルトのギューテンバッハ工場の外観。写真は1930年代当時のもの。写真右に見える採光用の窓がいくつも並んでいる建物がそれである。ここで数多くのストップウオッチが製造された

左はハンハルト初のクロノグラフムーヴメント、Cal.40をベースにツープッシュ式に改造したCal.41。ハンハルト製クロノグラフは第2次大戦時、ドイツ空軍・海軍のパイロットや士官に使用された。どれほどの数が製造されたかははっきりせず、現存数も極めて少ない

右は1952年のハンハルト社カタログの表紙。“ハンハルト＝ストップウオッチ”をわかりやすくアピール。また、ハンハルトは第1回バーゼルワールドにも参加。上の写真は初めて参加した56年のバーゼルワールドのブースでの写真。中央に写るのがヴィルヘルム・ユリウス・ハンハルトである

機械式復権とともに復活を遂げるハンハルト

写真は現在の拠点となっているハンハルトのギューテンバッハ本社。写真中央に写る明かりが煌々と輝いているのが本社だ。後ろには黒い森が写る。建物こそ現代のものとなっているが、1930年代当時のギューテンバッハ工場の写真と比べても、その雰囲気はあまり変わっていない

復刻版タキテレのサイドビュー。風防にフラットなサファイアクリスタルを、ムーヴメントはETAのCal.7750をベースに2カウンター仕様に改造した自動巻きクロノグラフを採用するが、左右非対称に設けられたボタンはオリジナルを彷彿とさせる

復刻版もオリジナル同様に大振りなリューズを採用。形状はやや異なるが、薄めに成形されたラグはオリジナルを彷彿とさせる（写真左）。右に掲載したオリジナルでは経年で失われてしまったが、4時位置のリセットボタンに施されていたレッドペイントを再現

一時はスイスに拠点を置いたハンハルトだが、経営と製造がドイツのギューテンバッハに統合されたことで、かつてのハンハルトを思わせる活気が戻りつつある。ストップウオッチはもちろん、現在はクロノグラフもここで製造されている

創業130年を迎えたのを機にハンハルトはギューテンバッハ本社に隣接する形でハンハルトミュージアムを開設した。貴重な同社のアーカイブや当時使用されていた機器を展示し、その歴史をいまに伝える。ちなみに事前登録があればガイドツアーも組んでもらえる

1930年代、ニュルブルクリンクのドイツグランプリでストップウオッチが使用されるなど、カーレースとの関係も深いハンハルト。同社は2015年にダカール・ラリー参加チームのスポンサーにもなった

●商品に関するお問い合わせは、リンクアップ（☎ 075-693-1236）まで

バイオニア プリベンター９

ストップウオッチやクロノグラフ専業のイメージが強いハンハルトだが、過去にはシンプルなスモールセコンドウオッチもわずかに製造した。一説には、戦時中の資材不足でクロノグラフが製造できない代わりに製造されたとされるが定かではない。いずれにしろ、いまでは非常にレアな個体となっている。現行バイオニアコレクションでは、そんな貴重なスモールセコンドモデルもオリジナルに着想を得て復刻されている。

■Ref.752.210-001。SS（40㎜径）。10気圧防水。自動巻き（Cal.HAN4112）。20万5200円

VARIATION

Ref.752.200-011。20万5200円

軍用時計を彷彿とさせる無骨でシンプルなスモールセコンドウオッチで、一見大振りに見えるが40㎜と程よいサイズ。アワーインデックスと針にはスーパールミノバを施し、視認性は良好。ベゼルはアンティークウオッチに多々見られる手の込んだ逆アールシェープになっており、細かなこだわりが見てとれる

スムースベゼル仕様レプリカのオリジナル。プリベンター９の原型となったモデルはクロノグラフを外したムーヴメントを使用したとされる。クロームメッキ×SS（40㎜径）。非防水。手巻き（Cal.41）。1940年代製／コレクター私物

希少なスモールセコンドモデルの復刻版やモダンなプリムスも導入

プリムス ダイバー

パイオニアがかつてのプロフェッショナルに向けた伝統のコレクションであるのに対し、現行のプリムスは現代のプロフェッショナルに向けた現代的なコレクション。アイコニックなレッドペイントはいかにもハンハルトらしいが、パイオニアとはまったく趣が異なり可動式のラグやシースルーバックなどのモダンなスタイルとデザインを特徴としている。プリムスコレクションのみ、文字盤にスイスメイド表記を持つが、これはスイスに拠点を置いていた時期に登場したコレクションゆえである。なお、コレクションにはパイロット、レーサー、ダイバーの3タイプがラインナップされているが、日本では現在のところ、ダイバーのみを展開予定。

■Ref.742.270-132。SS（44㎜径）。30気圧防水。自動巻き（Cal.HAN3809）。51万8400円

パイオニアコレクションとは異なり、ケースバックにはサファイアクリスタルを採用したシースルーバック仕様。ベゼルは逆回転防止機能付きの本格ダイバー仕様。ケースサイズは44㎜とやや大振りだが、可動式ラグが腕へのフィット感を高めてくれるため、着け心地は極めて高い。アワーインデックスや針に加え、インダイアルにも夜光が施され、視認性も抜群

●商品に関するお問い合わせは、リンクアップ（☎ 075-693-1236）まで

バイオニア マークⅠ

1938年、ハンハルト初のクロノグラフとなったCal.40を搭載したプリムスの復刻版。レッドペイントを施したプッシャーやコインエッジベゼル、コブラ針などオリジナルの意匠を忠実に再現。ほかのクロノグラフモデル同様、ベースにETAの自動巻きクロノグラフ、Cal.7750を採用。バリエーションとしてアイボリー文字盤をラインナップ。

■Ref.714.210-001。SS（40㎜径）。10気圧防水。自動巻き（Cal.HAN3601）。42万1200円。右の時計はオリジナルモデル。クロームメッキ×SS（40㎜径）。非防水。手巻き（Cal.40）。1940年代製／コレクター私物

VARIATION

Ref.714.200-011。42万1200円

スチールのスクリューバックを採用し、ケースバックにはコレクション名とモデル名、そして型番も刻印される。ラグはオリジナルを彷彿とさせる、ケース中央部分に設けられた薄い形状。1～12までのアワーインデックスとコブラ針にはスーパールミノバ夜光が塗布され、暗闇で強力に発光し、視認性は抜群

かつての軍用クロノに範を得た伝統のパイオニアコレクション

ケースバックはマークⅠと同様のスクリューバック式。デイト表示があるため、6時位置のインデックスがブロックであること以外は夜光も同じ。ラグの形状はマークⅠの薄いものとは異なり、ケースと一体となったモダンなスタイルを採用する

バイオニア ツインコントロール

1939年に登場したツープッシュ仕様のCal.41搭載のレプリカに範を得たモデル。オリジナルに近いディテールを持つマークⅡ（日本未入荷）と同じように見えるが、ツインコントロールは6時位置にデイト表示を持つほか、ケース形状がマークⅡとは異なる。また、コインエッジベゼル仕様以外にもスムースベゼル仕様がラインナップされているが、こちらも日本未入荷。マークⅠ同様、アイボリー文字盤がバリエーションとしてラインナップ。

■Ref.721.210-001。SS（42㎜径）。10気圧防水。自動巻き（Cal.HAN3809）。46万4400円。左の時計はオリジナルモデル。クロームメッキ×SS（40㎜径）。非防水。手巻き（Cal.41）。1940年代製／コレクター私物

VARIATION

Ref.721.200-011。46万4400円